

巨大な都市の小さな話

東京外国語大学大学院世界言語社会専攻

岩田 和馬

前近代の都市社会研究は、登山道の無い山を頂上まで登攀するようなものなのではないかと思うことがある。地図はあっても当然信用できず、コンパスもちゃんと働いているのか定かでは無い。特に、一般人の残した史料がほとんど存在しない前近代オスマン帝国のような地域の都市社会のあり方を明らかにしようとする、未開のルートを手探りで進むような感覚に陥ることがある。私は 18 世紀イスタンブールの同業組合と都市社会を中心的な研究関心としているが、普段の研究活動は、多様な史料群を大量に読解しながら情報を積み上げて推論を立てるという地味な作業をひたすら繰り返すだけで、楽しいと思えることもほとんどない。しかしながらごく稀に全く異なる史料同士が繋がることで、眼前の霧が晴れて登るべき山頂が見えた気がする瞬間がある。ここでは、私が史料を読んでいて垣間見たある山頂の姿について説明したい。

前近代の都市における物流は、いずれの地域においても人力ないしは動物の力に担われていた。宮廷が存在し、大規模な人口を抱えていた前近代のイスタンブールにおいても、社会の多様なニーズに応える様々な商品を運搬したのはハンマール (hammâl) と呼ばれる荷役人であった。ハンマールには、人力で物品を運搬する背負子荷役組合と駄獣を利用する馬方荷役組合の 2 種が存在する。荷役人はイスタンブールの市場や船着場ごとに組 (böyük) と呼ばれる集団を形成し、イスタンブールに数十存在した組は、大組合長と呼ばれる役職者によって統括される大規模な同業組合を形成していた。末端の荷役人は基本的に低所得であった一方で、荷役組合の頂点である大組合長は都市の運送業務を牛耳ることでそれなりに大きな金銭的な利益を得ていたものと考えられる。このため、荷役組合の大組合長職は 18 世紀の早い段階から軍人が俸給を返納して同業組合の役職を「購入」する慣行の対象とされてきた。

1722 年 3 月 28 日、馬方荷役組合の大組合長がアブデュルケリムからスレイマンに代替わりした。残存する史料からはこの時点で大きな問題が存在したことは確認できないが、この出来事はその後 9 年に渡って続く係争の引き金となった。4 年後の 1726 年 10 月、馬方荷役組合の前大組合長のアブデュルケリムが現大組合長のスレイマンを告訴した。アブデュルケリムは、「私が大組合長の職を購入していたにもかかわらず、砲兵隊出身のスレイマンが大組合長の地位を不正に購入して大組合長に就任してしまった」と述べ、自分もしくはその息子が大組合長になるべきであると主張した。この主張に対して馬方荷役組合の幹部たちは、「(アブデュルケリムは) 年老いて良心を欠いており、自らの役割を果たす能力がないばかりか、混乱と不和をもたらす (人物である)」と証言し、スレイマンを「政府の御用を果たす能力があり、我々一同満足している」と評したことによりアブデュルケリムの訴訟は退けられた。

1730 年 10 月 23 日に今度はアブデュルケリムの息子イブラーヒムが馬方荷役組合の大組合長職に任命されることを求め、大組合長となることが認められた。1730 年 10 月という日付はイスタンブールの歴史において非常に示唆的である。同年 9 月末にパトロナ・ハリルの乱と呼ばれる民衆騒擾が発生し、大宰相イブラーヒム・パシヤは処刑され、皇帝アフメト 3 世が退位に追い込まれたのである。前述のスレイマンは大宰相の部下であるカラ・ムスタファの庇護を受けており、おそらくカラ・ムスタファも政変の中で権力を失ったと見られる。後ろ盾を失ったスレイマンは 10 月時点で大組合長職を解任されており、代わりに馬商人組合のハサンとユスフという人物が馬方荷役組合の大組合長職を占有していた。イブラーヒムが展開した「(ハサンとユスフは) 部外者であり、馬方荷役組合が被害を受けている」という主張はおそらくある程度正確であっただろう。しかしながらイブラーヒムの真意は、この混乱状況に乗ずることと父の遺志を継いで馬方荷役組合を搾取することにあったのではないか。

1731 年 1 月になるとスレイマンは、イブラーヒムが馬方荷役組合の一部と結託することで不正に大組合長となったことを主張する嘆願書を提出した。馬方荷役組合の構成員への聞き取りでスレイマンは有能で清廉潔白な人物であると証言された一方で、イブラーヒムは私腹を肥やすことしか考えていないと伝えられたことで、スレイマンが再び馬方荷役組合の大組合長として認められることとなった。

一連の経緯からは、馬方荷役組合の大組合長職という巨大な都市社会の中ではごく小さな地位を巡って争う人々の姿を見ることができる。軍人出身の人物が大組合長職を「購入」する事例は他にも多数確認することができるが、スレイマンの場合に見られるように政権有力者とのパトロン関係がその背景に存在していたことが示されていることは稀である。このような人的ネットワークを史料から確認することは通常非常に困難であるが、パトロナ・ハリルの乱という政変の影響によりその一部が顕在化したと見ることができる。この事例からは、都市社会の小さな出来事の裏に広大な都市社会のネットワークと政治の「大きな話」が横たわっていることを垣間見ることができると言えるだろう。また、特に政変で粛清された大宰相の係累にあったにもかかわらず構成員からの絶大な信頼を背景に大組合長に返り咲いたスレイマンと、親子揃って不信任を突きつけられたアブデュルケリムとイブラーヒムの人柄を見出すことができるのは大変興味深い。普段私が読解に取り組んでいる無味乾燥な行政文書において、300 年前の一般人の人となりや行動原理を見出すことは非常に難しい。そのような意味では、この一連の史料は研究の面白さを感じさせてくれる稀有な存在である。

さて、研究を続ける中で見出した一つの山頂についてここまで説明してきたが、恥ずかしながら博論という名の山を私は未だに登り切っていない。これはひとえに自分の能力不足によるものであるものの、渥美国際交流財団によるご支援を賜われたことによってこの一年間を走り抜けることができ、大きな前進することができたと思う。単調な作業を繰り返し、楽しいと思うことも少ないと冒頭で述べたものの、

未開のルートを分からないながらに切り開いていく面白さをこの一年感じることもできた。いち早く山頂からの景色を報告できるように研鑽を積み、次の高嶺を目指す準備を進めていきたい。